

アメリカ・サバイバル記（2）

Desert Storm と Step Mother/Father

松本 康子

学校教育と言えば学業と考えがちです。アメリカの学校では、クラスの中で取り上げられる話題によっては、子ども達が受ける影響は千差万別です。

前回、私にとって、「アメリカはいまだに外国だ」と書きました。わが子の成長ぶりを見て、強く感じるのです。いつの頃からか、子ども達と話しをするたび、「同じ女性なのになぜこうも違うのか」と、考え始めました。同じ年齢だった頃の私に比べると、ずい分「たくましく」写るからです。その娘達をつい「興味深い」という目で見てしまいます。

Desert Storm

小学校4年だった次女の話です。「先生が『今、Desert Storm（1990年代の湾岸戦争）に従軍しているお父さんかお母さんがいる人』って聞いたら、クラスの中に5人もいたの。」「手を上げたお友達は、どんな様子だったの」と聞くと、「お母さん、とってもかわいそうなの。だって、『自分が悲しい顔をしたら心配をかけるから、笑顔で見送った。』とか、『毎日無事かどうか心配だけど、仕事だし、それに国のために戦っているから仕方がない。』って言うんだよ。」

小学校4年生といえは10才。年齢的にも精神的にも幼いのです。「先生はどうしてそんな質問をするのか、説明してくれたの？」と聞くと、「社会の時間だったから、どうしてそんな戦争が起こったのか、どうすればそれを解決できるのかを考えるためだ。」「だけど、そんなお友だちに、私たちが出来る事やしてはいけない事を、みんなで考えてほしいという話になったから、それが本当の目的だったんじゃないかな。」という答えが返ってきました。

何と言ってやればいいのか、すぐには思い浮かびませんでした。わが子のすぐ近くに、従軍するその家族がいる事。また、その子どもが「戦争」や「死」を予感するようなセンシティブな気持ちを語り、それをクラスで話し合うとは。授業中での出来事だということも驚きですが、子どもの話を聞かなければ、先生の意図する事は想像すらできなかったでしょう。

当時、新聞やテレビで、「オイル」と「デザート・ストーム」のニュースを聴かない日がありませんでした。毎日の生活を

車に頼るアメリカに住んでいるかぎり、オイル問題は切実な話題です。家計を預かる主婦ならば、ガソリンの値動きに敏感にならざるを得ません。私にとっても身近な問題でしたが、その程度の受け取り方をしていたのです。私とは違った次元で、次女は子どもなりに、デリケートな問題を現実として経験していました。

親と離れて暮らした経験もなく、また、親が「仕事」として「戦争」に関わる職業に就いているという事は、次女にとってのカルチャー・ショックだったようです。一朝一夕で語りつくせる話ではない上、どう考えても、私では次女の助けになる事は言えそうにない、と思えました。結局、次女の幼い問題意識を混乱させないよう、「これからは、お友だちの様子を注意して見てあげたら？」「お母さんにも、どう

しているのか教えてね。」というに止めました。

この出来事は、自分を取巻く外の世界に目を向ける、次女のターニング・ポイントとなったのではないかと思います。いや、次女だけでなく私自身も、子ども達は、私が受けた学校教育とはずいぶん違う教育を受けているようだ、目を見開かされる事になりました。

